

ユングによるパーソナリティ理論再考 ——自然のダイナミズムを手がかりとして——

吉川 眞理

論文要旨

ユングのパーソナリティ理論はフロイトの精神分析理論に大いに触発されて発展した。意識と無意識に関するパーソナリティ理論として、タイプ論と個性化の理論は、心を自然の一部としてとらえる点にその独自性がみとめられる。ユングによれば、心の理論は生命にあふれた自然であり、心のダイナミズムは生命的要素に基づくものであった。本研究では、ユングのパーソナリティ理論や研究を、自然や生命論に由来するダイナミズムの観点からとらえることを試みる。そこで以下の二点が明らかになった。第一に彼のパーソナリティ理論において無意識の補償作用が重要な役割を果たしている。第二に、タイプ論と個性化理論は共に、個人がその人生において独自性を生きることを重要な目的としている。ユングのパーソナリティ理論においては、意識と無意識に関する理論、タイプ論、個性化理論が相互に関連しながら、自我中心主義を超越して、意識領域と無意識領域からなる本来の自分自身の実現に向かう動きを論じている理論体系である。

キーワード【C.G.ユング、自然、補償、個性化、パーソナリティ】

序

フロイトの精神分析理論に大いに触発されて展開したユングのパーソナリティの理論の特徴として、心を自然の一部としてとらえようとしたことが挙げられる。ウィーンの都会で生まれ育ったフロイトと異なり、ユングはラインの滝に近いシャフハウゼンで幼児期を過ごしたことに始まり、バーゼルやチューリッヒといった水の豊かな自然に近い都市でその生涯を送っている。青年期のユングは、歴史や哲学を学ぶのか自然科学を学ぶのか進路選択に迷っていたが、その時期にみた夢によって最終的に自然科学を学ぶ決心をしている。以下のような夢であった。

「私は森の中にいた。森には水路が縫うように通り抜けており、その一番暗い所に、私は茂った藪に囲まれた丸い池のあるのをみた。半ば水にしたって、とても奇妙で不思議な生き物が横たわっていた。それは円い動物で、乳白色に輝き、無数の細胞か触手のような形をした器官から成っている直径1メートルの巨大な放散虫だった。このすばらしい生き物が、秘密の場所の澄んだ水の中に、邪魔されずに横たわっているのは私には言いつくせないほど不

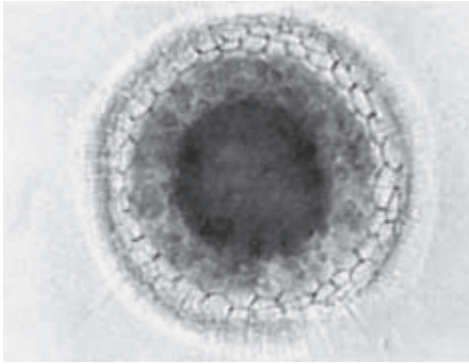


図1 生きている放散虫 (新潟大学理学部地質科学科)

<http://www.sc.niigata-u.ac.jp/sc/dept/geo.html>

思議に思えた。それが私の中に知識に対する強い欲望を生じさせ、どきどきしながら目を覚ましたのだった。」¹⁾

ユングの日常生活において、このような森はごく身近にあり、彼の心的世界を形成していたのだろう。10代の彼は科学雑誌を読み、近くの山々で化石や鉱石、昆虫の採取を行っていた。ライン地方の平原の砂礫層の穴からマンモスの骨、近隣の古い墓から人骨さえ掘り出し収集した。植物にも強く惹きつけられていたが、植物を採取することはしなかった。

それは植物のことを「成長して花をつけているかぎりにおいてのみ、意味、隠された秘密の意味、神意をもつ生き物」²⁾と感じていたからという。彼の自然に対する姿勢は、近代的な科学的意識というよりは、太古的な感覚に近いものだったのかもしれない。このような彼の自然に対する独特の関与は後の彼の分析心理学の基層を成すように思われるのである。

こうして自然科学の道を選び医学を学んだユングにとって、生きて動く自然こそが、心のモデルであり、心のダイナミズムの背景にある生物学的要因が重視されたのである。さて本論文ではユングの主要な人格理論、心の発達に関する理論を取りあげ、その理論の自然性、生命論的な側面について検討することを目的としたい。

第1章 意識と無意識の関係に関する理論

ユングのパーソナリティ理論の鍵概念は意識と無意識の関係である。ユングは、1903年の連想実験の研究によって無意識の作用を実証したことから、無意識を発見したフロイトと親交を深めた。ユングは、フロイトから精神分析理論に対する忠誠を期待されるようになったが、教義化した精神分析の守護者となるよりも、科学者として自分のやり方で無意識を探求する道を選び、フロイトと決別する。両者とも無意識の科学的探究をめざしていたが、そのアプローチはある意味で対照的なものであった。フロイトのアプローチは還元的であるのに対して、ユングのアプローチは構成的なものであった。

フロイトにとっての無意識は、自我によって意識から排除された内容であり、これを意識に再統合することが心の発達をもたらすとした。これに対してユングにとっての無意識は表1のように個人的無意識から集合的無意識までのスペクトラムを成す。そこで無意識は常に自我の持つ方向の偏りを修正するように補償的に作用するとされた。

ユングは、1916年に執筆された「超越機能」において、意識と無意識の補完性について

表1 個人的無意識から集合的無意識へのスペクトラム

個人的 無意識 集合的 無意識	意識の方向に合わないために、意識化を抑止された素材
	個人の過去の記憶の断片
	微弱なため無意識の中に取り残された要素
	十分な閾値に達していない空想の混合物
	人間精神に受け継がれてきた構造的な痕跡

(Jung, C. G, 1916 「超越機能」を参考に著者作成)

まとめている。これによれば、意識の機能は本来ある方向性を持つために、その方向性と一致しないものは捨象され、自らを狭めてしまうのである。あまりに意識が一面化してしまうと、意識の機能の幅を拡大するためには、意識から締め出された無意識の内容を意識に取り入れる必要が生じる。このようなときに、心理療法において、無意識の内容を媒介する夢を取り上げ、扱うことが意識の偏向の修正のために役立つという仮説がユングの夢の分析の基礎となっているのである。

そして、無意識は、集合的な神話や昔話、宗教の儀式、錬金術における象徴的表現や、個人的な夢や空想というかたちで産出されるという考えのもと、これらを収集し、考察して、無意識の動きについて思索を深めた。彼によれば、無意識には、個人の意識的生活の補償としての個人的無意識と、個人の経験に関わらず、文化や時代を超えて人類に共有されている集合的無意識の二層から成る。集合的という語には「大勢の人に共有された、ある社会や民族や人類に固有の」という意味が込められている。集合的無意識について、ユングは「集合的無意識の内容ははっきりした好みやあるいは見解となって意識に入ってくる。これはふつう客体に規定されているものと理解されるが、基本的には誤りである。これは心の無意識的な構造に由来し、客体の作用を通して誘発されたものだからである。」という定義を行っている³⁾。この無意識的な構造について、ユングは元型と名付けた。それは、「客体に対する心的理解の様式ないし形式を（このように）呼ぶように提唱してきた。（中略）元型とは、シンボルの型式である」⁴⁾と述べている。

フロイトの精神分析理論が自我による意識的な自己認識であり、これに対してユングの心の理論は、無意識のもつ補償作用によって展開していく。それは自然そのもののように、意図をもたず、バランスをとり、時間の経過とともに外界との相互作用の中で本性が展開していく過程となるのである。

ユングのパーソナリティ理論の基礎となる心の力動と構造は、『自我と無意識の関係』において明確に論じられ、パーソナリティの個人差・多様性と類型化について大著『タイプ理論』がまとめられた。そこでは、さらにパーソナリティの発達に関する理論として、心が生来の可能性を発現する過程としての個性化過程を論じる個性化理論が展開されている。ユン

グは、この個性化を分析心理学の目的と位置付けている。これらの理論は、異なる著書にまとめられてはいるが、相互に関連しており、全体として一つのパーソナリティ理論体系を成している。ユングの心の理論は、無意識に関する理論を基盤に、タイプ理論として人の心の多様性をとらえ、また個性化過程論として、生涯にわたる心の変容の可能性をとらえようとしているのである。

ユングは、これらの理論において、個の心の多様性、および個の心に変容をもたらす要因として、一貫して無意識に着目し、意識と無意識の間の相互的作用、すなわち、心の補償作用のメカニズムを論じた。なお、対人関係の中で、個人間にはたらく力動については、転移の概念がこれを扱うが、その考察は次の機会に譲り、本論では個の心におけるダイナミズム、個人内のダイナミズムに限定して焦点をあてることにしたい。

第2章 タイプ理論

1) タイプ理論の成立

ユングは、『変容の象徴』を1912年に書き上げて「教師にして師匠なる人の足下へ、不服従の、しかし感恩の弟子より」との献辞とともにフロイトに送り、フロイトから「私たちの私的關係そのものを解消する」との手紙を受け取った。こうしてフロイトとの関係に終止符を打ったユングは、1913年から1917年にかけて内閉的な生活を送ったことが知られている。フロイトとの感情的な葛藤がユングに心理的な衝撃を与えたことはまちがいない。当時のユングは、フロイトとの関係の断絶の後、チューリヒ大学の私講師も辞任して、自宅での個人臨床と思索に没頭する日々を送っていたのである。その4年間の内閉的な生活の出口が見えたころ、ユングは『自我と無意識の関係』の執筆を開始し、『心理学的タイプ』の研究にも取り組むようになった。前者は1928年、後者は1921年に刊行されている。ユングは、その自伝において、心理学的タイプ理論の研究動機は、フロイトやアドラーと異なる自分の見解の位置を確かめるためであったと述べている。研究の成果として「個人によってなされる判断が、その人のパーソナリティのタイプによって左右されること、またどんな観点でも必ず相対的なものであるという洞察」を得たという。タイプ理論においては、フロイトは外向タイプ、アドラーは内向タイプとして位置付けられた。明記されていないが、ユング自身も内向タイプに位置付けられることは確かであろう。外向タイプと内向タイプは、相対的なタイプの違いであり、価値は等しいというのがユングの主張であった。フロイトとの意見の相違、激しい感情的葛藤はこのタイプの違いから生まれたことを納得できて初めて、ユングはその痛手から抜け出ることができたのである。

2) タイプ理論の概要

①タイプの考え方

「タイプの対立は普遍的な心理現象であり、何らかの生物学的な先駆形態を持っているに違いない」⁵⁾と述べられているように、ユングは、外向／内向が環境に対する意識の選択や学習により生じたものでなく、何らかの生物学的要因によって生じていることを推論している。つまり、決定的要因は生まれ持っている素質とされるが、時にたとえば母親の構えが極端である場合、何らかの外的要因が強い場合には、子どもの本来の素質が捻じ曲げられて出現してタイプが偽造されて現れてくることがあるという。この無理な適応スタイルは後年、神経症の症状を出現させ、「その治療は、彼の自然にあった構えを引き出して育てることによって初めて可能になる」⁶⁾という。このような彼の考えは神経症の治療理論として非常に興味深い。

②内向と外向

外界の対象に対して積極的にかわることで適応しようとする外向に対して、内向は、外界の対象とのかわりを回避することで適応しようとする。外向は外界とたくさんの関係を結ぶことで適応しようとするが、内向はその関係を限定してエネルギーの支出をできるだけ抑えようとする。その結果、対人関係のスタイルにこれが顕著になると、社交的な外向と、少数の人とのかわりの中で安定する内向としてみられるのである。

ユングの記述した外向と内向の特性は表2のようにまとめられる。

③機能によって分類する機能タイプ

「タイプとは発達の偏りである」としたユングの言葉は含みが深い。意識的な心の4つの基本機能としてユングは、感覚・思考・感情・直観を挙げている。これら4つの機能は、思考と感情、感覚と直観の二軸によって構成されている(図2)。そして、これらの基本機能は同じ程度に分化して、それに応じて使いこなされることはなく、たいていはどれか一つの機能が前面に出て、残りは背後で未分化なままになっているという。この状況について「優越機能が最も意識化され、意識の制御や意識的な意図に完全に従っているのに対して、未分化な機能はどれもあまり意識的ではなく、その一部は無意識的であり、意識の自由になることがほとんどない。」⁷⁾、「未分化な機能は、常にぎわだつた自己中心主義と個人的な偏見によって極度に囚われた状態にあり、無意識と密接に関連している」⁸⁾という。そこで分化した機能を優越機能とよび、これに対して特に優越機能の対極にある機能は、意識から抑圧され、無意識にとどまっており、劣等機能と位置付けられるのである。4つの基本機能のうちのどれかの機能が優越であるとき、それは、「強度・不動性・首尾一貫性・信頼性・適応性」⁹⁾をもつ機能であり、これに対して劣等な機能は「他者や環境に影響されやすく、被暗示性が強く、きまぐれな過敏性があり、信頼性が乏しい」¹⁰⁾という。優位な機能は意識に存在するが、劣等な機能は無意識の領域にとどまっている。ユングは、無意識について「それ

表2 ユングのタイプ論における外向と内向の対比

外 向	内 向
<p>「拡大」性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・全エネルギーをかけて外的対象に向かう ・他者の意見、外界の既成事実を基準にして判断や決定を行い、客観性を重視する ・外界に対して、関心や注意を向ける ・順応：外界からの要求に対して合わせる ・周囲の人々が今、必要としていること、彼に期待していることを適切に実行する ・外界からの要求の犠牲になり、自分自身が犠牲になってしまう。 <p>〈病理的現象〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外的対象の中に引きずり込まれ、自分自身を見失うことがある。 ・その結果として生じる心的機能の障害及び身体的障害を生じる（補償的意義：主体は自重せねばならなくなる） ・他人の関心を集めよう、周囲に感銘を与えようとする傾向がある。 ・暗示を受けやすい ・他人によって影響されやすい ・意識の補償として、無意識的な要求は、原始的、幼児的・自己中心的 ・過剰な適応から無気力に転じることも ・薬物乱用・自殺の危険 	<p>「限定」性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外界の要求に対して防衛線をはり、エネルギー支出を可能な限り抑えて、自分のために安全で強力な陣地を築く ・判断や決定は主観的要因を基準に行う。 ・外的な印象が、主体の中に布置するものを抛り所とする。 <p>⇒世間の基準に照らして幸せかどうか？ではなく、それが内的世界にどのような影響を及ぼすかが問題になる。</p> <p>〈病理的現象〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外的対象との関係は、無意識の次元で結ばれ、幼児的・太古的な様相をおびる。新奇な他者はあたかも未知な危険を秘めているように恐怖や不信の念を起させるが、昔からなじみのある他者はまるで見えない糸でつながっているかのようである。 ・自我が心的過程の中心であると誤解してしまうと、病的な自我肥大に陥り、外的対象と本来の関係をもつことができなくなる ・外的対象の存在は意識的には過小評価されているが、無意識ではこれに威圧され、脅かされるため、神経が過敏になり、疲れやすさや慢性疲労をもたらす。

(Jung, C. G, 1921 『タイプ論』を参考に著者作成)

は、定義からいって、まったく知りえないものである。われわれはただ、夢などのいわゆるその産物から、それが存在していることを仮定しているだけである。」と述べている。ただし、臨床的経験から「夢がたいていの場合に意識的な構えに重要な修正をもたらさう内容を持っていることは結論できよう。このことから我々は無意識に補償機能があると言って正しいと考える」¹¹⁾と述べており、「時がたつにつれて、個人にとって、それまで無視してきたものも発達させる必要が生じてくる。」¹²⁾この発達、これまで劣等であった機能の分化という形で起こり、それは意識に対する無意識の補償的な機能として人格の発達に重要な意味を持つと考えられたのである。

第3章 自然の産物としての夢の臨床的活用

1) 心理療法における夢の活用

フロイトの歴史的な著作である「夢判断」¹³⁾は、無意識の存在や、これに対する意識の反

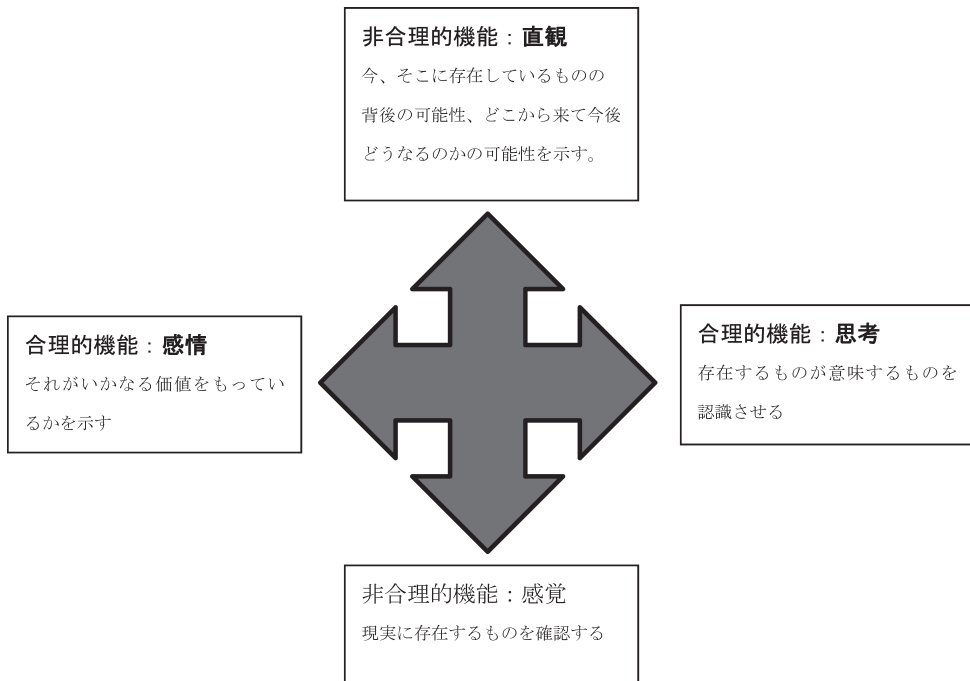


図2 非合理的機能と合理的機能の2軸の直交

応について論じており、夢が成立する一般原理を明らかにしようとした試みであった。これに対して、ユングは、それぞれの夢が個々の夢見手に及ぼす影響やその意義を重視する立場に立ち、夢が個人の心理的機能不全を引き起こしている意識の偏向を補償する可能性を持つことに着目した。フロイトは夢を科学的に扱おうとしたのに対して、ユングは、夢を心理療法に活用できる素材として扱おうとしたのである。

ユングは、心理療法場面において、クライアントに夢の報告を求め、その夢についてさまざまな質問を行い、夢のイメージを活性化し、類似性のある神話や儀礼、また物語の要素などに結び付けて話し合う拡充法を編み出した。そこでは、報告された夢イメージそのものに集中して、そこから多角的な連想を求める。すなわち、夢の中のイメージを中心に、可能な限り多くの連想をたずねていく方法である。またユング派の心理療法においては、ここでセラピスト自身もそのイメージからの連想を語ることも多い。またその連想の素材は、多様な文化や時代の神話や昔話、儀式、宗教から得られるのである。

ユングは「私には夢の理論などまったくなく、夢がどのように成立するのか知らない。私の夢の扱い方がそもそも方法という名に値するのかもまったくわからない。」¹⁴⁾ (1929年の「心理療法の目的」と題する講演)と述べているが、臨床実践において夢によって無意識の動きの方向性についての示唆が得られ、結果として夢を見た人の生が流動化する実際の意義を重視した。クライアントと夢について話し合い、夢を「人格発達の別の可能性がどこか過

去に埋もれたままである」「意識は認めようとしていないが、結婚や社会的地位などが葛藤をはらんでいる」¹⁵⁾等のメッセージとして受けとめる必要があると考えた。そこでは、夢内容を特定の意味に結び付ける還元的な解釈ではなく、むしろ夢から、クライアントが思い浮かぶことをできるだけ多く引き出し、さらにセラピストも同時に思い浮かぶことを語る対話の中で、両者の中に何らかの意味が浮かび上がる過程が重視されたのである。

夢によってもたらされた新しい意識の内容が、解釈を媒介としてクライアントの意識に統合されるためには、その解釈内容的確さだけでなく、その内容がクライアントの心に受け入れられる準備が整っていることがその前提となる。その意味で、夢の理解においては、セラピストが先行することなく、クライアントのペースに同期する感性が求められるのである。こうして、夢の理解は、セラピストとクライアントの二者間に成立する。「夢のイメージはあらゆることを意味しうるし、あるいは何も意味し得ない。そもそもある事物がそれ自体で何かを意味することがあるだろうか？ 確かなのは、解釈する、すなわち意味をあたえるのは常に人間だということである」¹⁶⁾というユングの示唆は興味深い。

2) 夢の自然性と目的性

フロイトは、夢は、自我による偽造、圧縮、置き換えなどによって、不可解なものとなっているため、夢を理解するためには、これらの自我の加工を復元させる必要があると考えた¹⁷⁾。これに対してユングは、もっと単純に、夢を自然の産物としてとらえた。ユングは1938年10月25日の子どもの夢セミナーにおいて「夢はご存じのように自然の現象である。意図して生じるものではない。意識から推しはかられた心理学で説明することはできない。夢は意志や願望、自我の意図や目標設定によらない特定の機能である。あらゆる自然の機能と同様に、意図なしに生じるものである。」¹⁸⁾と語っている。さらに、最晩年の著作である『人間と象徴』でも「有機体の成長と心の成長との間には、原則的にはなんらの差もない。植物がその花を産出するように、心はその象徴を創造する。すべての夢はこの過程の表れなのである」¹⁹⁾と述べている。

このようにユングは、一貫して、夢を自然の現象、自然の過程の産物としてとらえてきた。そこで夢は生命現象の一部とみなされており、それゆえに何らかの目的をもって存在することになる。一連の夢の観察から、彼は夢がある目的や方向性を持っていることに気づき、夢を目的論の視点から扱おうとしたのである。具体的にこの方法を紹介すると、夢見手にこの夢の目的は何か、この夢はあなたにどんな影響をもたらそうとしているかを問いかける。目的論的な視点によれば、私たちの人生、心的生活は個人的な目的に向かって営まれているが、私たち自身はその途上においては、その目的が何であるか知ることはできない。しかし、その目的に関する情報は、注意深く夢を観察することでもたらされると考えられたのである。

フロイトによれば夢は本能衝動によって産出される。彼は「この無意識からの刺激が夢を

作り出す。夢を構成する心的エネルギーであるのだ。…それぞれの夢には本能的な願望が充足されたかたちで表現されているのである」²⁰⁾と述べている。

これに対してユングは、「夢の一般的な機能は、微妙な方法で心全体の平衡性を取り戻させる夢の材料を産出することによって、心理的なバランスを取り戻させる試みなのである」²¹⁾と書いている。彼はこれを夢の補償役割と呼んだ。それは心そのものの補償機能である。ユングは、本能の部分から人間の理性の部分に向けて、象徴という形式で送られたメッセージとして夢をとらえようとした。そこでユングは、本能という用語をフロイトよりも広い意味で用いている。ユングは、私たちの意識は、人間の心の本能的な層からや、心的現象の身体的基盤から、ますます遠ざかりつつあると考えた。そして、これらの基本的な本能的な層は無意識の一部として残存し、時として夢イメージの形で認識される可能性を持つと考えたのである。ユングは、「彼の意識的態度が偏っているものであればあるほど、それが最適なものから遠ざかっていなければならないほど、いきいきとした夢が、心の自己制御機能としてあらわれる可能性が高まる」²²⁾と述べている。彼は、この内的な主体的な統合機能を「個性化機能」とよび、その目的を、意識内容と無意識的内容の統合、あるいは意識をより大きな人格領域へと同化することであると論じたのである。

第4章 個性化の理論

1) 個性化概念の概要と方法論

ユングは、意識が持つ偏向を補償する無意識の作用に着目し、その作用がある目的性を持つことに気付いた。「心的な生命過程は、ほかのあらゆる生命過程と同じように、単に因果的な経過であるだけではなく、目的志向的な合目的な過程でもある」²³⁾と述べられたとおり、無意識は、「個性化の発達」²⁴⁾、すなわち「個人が発達して一般的なものや集合的なものとは異なった存在になること」という目的のもと、意識に対して、夢や空想におけるイメージとして現れるのである。

ユングは、このイメージについて、集合的無意識における元型がその発生源であると考えていた。元型に由来するこれらのイメージの出現のプロセスは、意識が「袋小路、あるいはにっちもさっちも行かない状態」²⁵⁾であるときに始まるとした。多くの場合、現実から意識の容量を超える要請があるとき、あるいは意識がこれに応じて過剰適応し、その人、本来のあり方から大きく逸脱したときなどがそのきっかけであり、ユングが当時の用語で神経症と診断した状態がこれにあたると思われる。

ユングは、そのイメージに対して「イメージの中で体験すること、かつイメージを体験すること」²⁶⁾が大切であるとした。それは、ユング自身の体験に裏付けられた指針に他ならない。ユング自身、前述のフロイトとの決別の後、1913年から1917年にかけて内閉的に過ご

された期間、個人臨床と家族との団らんの時間を大切にしながらも、独特な方法で思索のセッションを継続していた。それは、内的な空想を語り、書きとめ、描くというアクティブ・イマジネーションの実践であり、それらの空想と関連する文献を探索し考察する思索であった。その内的作業は、その後、『赤の書』としてまとめられた。この『赤の書』は、ユング自身の無意識から出現してきた元型的イメージにおける体験を、イメージの形として表現する作業の産物であった。イメージの体験は相当に強い情動を伴い、ユングの心理的安定を脅かすものであったが、ユング自身、これを何とかくぐり抜けることができたのである。ユングはこの作業の意義について、「感情をイメージに何とか置き換えることができた分だけ私は内的に安心し、自信を取り戻すことができた。もし私がイメージを感情の中にうもれさせたまま隠したままであったならば、それらによって細かく引き裂かれてしまっていたかもしれない。」²⁷⁾と述べているとおりである。

2) 自我を超える個性化

このように、元型的なイメージが出現するプロセスが、無意識が意識に統合される統合的過程として進行した場合、意識がより高い水準に移行することが期待されるという。しかし、意識が弱体化して、無意識からの動きをコントロールできない場合、精神病的な状況に陥ってしまうのである。それは、集約的な無意識に自我が憑依された状態に他ならない。したがって、個性化は、この無意識から発信されたイメージに開かれながら、しかもこのイメージに圧倒されず持ちこたえていく、バランス感覚と耐性力が求められるのである。結果として、個性化は、集約的な無意識のイメージの持つ集合性へのとらわれから脱出して、個人として対決して、向き合い、意識に統合する作業となる。その結果、「個人が発達して一般的なものや集約的なものとは異なった存在」²⁸⁾となり、「個性的人格の発達を目的とする分化過程」²⁹⁾、すなわち個性的な生き方が可能になるのである。しかし、これは孤立や利己的、個人主義的なあり方と混同されてはならない。なぜなら「個人は単なる個的存在であるだけでなく、生存するためには集合的關係を前提にしており、そのため個性化の過程も単独化へではなく、より緊密で一般的な集合關係へ向かう」³⁰⁾からである。

「個性化とは個性ある存在になることであり、個性ということばが私たちの内奥の究極的で何物にも代えがたいユニークさをさすとすれば、自分自身の自己になることである。」³¹⁾と述べられた通り、それは、自分自身の身体的生理的な個性について自覚し、これを生きている時代と社会において、最大限、自分らしく生きる生き方を見いだすことでもある。このとき、生きている時代精神や社会通念にとらわれることなく、また自分自身の内的な無意識の力にも圧倒されず、個としての自分を見つめ、その自分にしか生きられない人生を生きていくプロセスである。しかもこのプロセスは、本来の自分自身が実現されていくという意味で、自我にとっては、まだ実現されていない「本来の自己」に向けて動かされるプロセスと

なる。

この意味で、自我は個性化において、自ら主導をとることはできない。その自我が「本来の自己」により近づくために、今あるあり方が「行き詰まり」であることを見つめ、いったん、これまでのあり方を放棄することが必要となるのである。したがって個性化の過程においては、これまでの自我主体のあり方からも脱却することが求められる。そのため、それは自我の超越とあり、理性や論理でとらえられる範囲を超える領域への踏み込みともみなされるのである。

3) 個性化過程の検証

本論文で紹介した自然のダイナミズムを基盤としたパーソナリティ理論の枠組を構築したユングの考察は、その生涯を通して、個性化過程へと焦点づけられていく。ユングは、この個性化過程の検証を、主として、個人の夢、キリスト教の儀式、錬金術師の著作の3つの素材をもとに行った。それぞれについて、自然のダイナミズムに着目した視点からまとめると以下のとおりである。

①個人の夢におけるマンダラ象徴による検証

ユングは、個性化の過程が進行しているときには、個人の夢において、求心過程、あるいは人格の新たな中心の形成過程において、元型的性質をもつイメージが生じると考えていた。ユングは、この新しい中心を自己 (Self) と名付け、そのようなイメージがマンダラの形で出現することを見出したのである。マンダラ象徴についてユングは、1938年にダーズリン近郊のプティア・プスティ僧院の僧院長であるラマ僧から以下のような説明をうけた。「マンダラとは精神の像であり、深い学識を備えたラマ僧のみが想像の力によってこれを形成することができる。マンダラには一つとして同じのものではなく、個々人によって異なる」³²⁾。したがって僧院に掲げられているマンダラは大した意味を持たず「真のマンダラは常に内的な像である」。それは、心の並行が失われている場合とか、ある思想がどうしても心に浮かんでこず、それを探し出さなければならない場合に想像力によって徐々に心の中に形作られるものであるという³³⁾。しかし、一方でユングは、それらのマンダラが共通して四部構成を持ち、中心に重要なイメージが配置されることを指摘している。ユングは、若い科学者の400の夢および幻覚像の系列³⁴⁾を素材に、その夢系列の中でたびたびマンダラの象徴が現れることを示して、夢におけるマンダラの出現を検証した。以下のような夢がその例である。

夢：ある見知らぬ女が夢見者を追い回している。夢見者がいつまでも円を描いて走り続ける³⁵⁾。

これらの夢に対して、ユングは夢見者の内面に円運動を見なされうる何ごとかが生じており、その事象が今、主体自身によってそれにとらえられる限度にまで意識領域に接近してきたと説明している。さらに見知らぬ女は、アニマとして彼の無意識を代理するものであって、

それが夢見者を圧迫して円運動に追い込んだのであり、円運動は、自我と異なる中心点がすでに潜在的なかたちで与えられており、自我がこの中心点の周りを動き始めたことを示しているという。

夢：暗い中心部の周囲を光が円環をなして旋回する。それから夢見者は、暗い洞窟の中を歩いている。洞窟の中で善人と悪人との戦闘が演じられている。しかしまたそこには、一切を知り尽くしている一人の君主がいる。この君主が夢見者にダイヤモンドが一つ取り付けてある指輪を贈り、これを夢見者の左手の第四の指にはめている³⁶⁾。

ユングはこの夢から、夢見者の個性化の過程について、光の循環が意識の働きであり、中心がまだ無意識の状況にあり「暗く」葛藤に満ちているとした。ユングの考えによれば自己は対立物とその葛藤において出現するものであるために必ず葛藤を通らねばならないという。したがって、中心は対立する両極の葛藤の間にあるが、同時に、この夢では葛藤のすべてを『知り尽くしている君主』のイメージとしても出現している。指輪の授受はこの中心である自己との契りを示しているが、それが左指であることから無意識の過程にとどまっているとしている。

以上のような夢をマンダラ象徴の出現としてとらえると、図としては静的に描かれるマンダラは、実は中心を持つ循環や両極の葛藤といった動的なイメージであることがわかる。個性化の過程はダイナミックな過程であり、その過程にはこのような動的なイメージが夢の系列においてあらわれるというユングの発見は興味深いものである。

②キリスト教の儀式による検証

ユングはすでに初期の著作である『変容の象徴』において、アメリカ人女性ミラーのファンタジーを素材に拡充法を用いて心の変容の過程論を展開した。それによれば、「ミトラ教の犠牲がなお古代的な動物の供犠によって象徴されており、もっぱら衝動的な人間の馴致、訓育を目標とするのに対し、人間の死によって具象化されるキリスト教の犠牲の思想は人間全体を捧げることを、すなわち動物的本能を矯めるだけでなく全面的に放棄することを、さらにそのうえ人間特有の精神的機能をこの世を超えた精神的目標に向けて鍛えることを、要求する。」³⁷⁾ここに記述されたその心的過程は、人間が自我中心の在り方を断念する、深く、倫理的な過程であった。

ユング自身、プロテスタントの牧師の息子であったため、キリスト教の教会の営みはユングの幼児期、児童期にかけて日々の生活に身近なものであった。自伝³⁸⁾によれば、父親からキリスト教教義の手ほどきを受けたが、父親のキリスト教の理解と体験の限界を知り落胆している。ユングは、青年期に何度か父親にキリスト教に関する議論³⁹⁾を試みたが、父親の「考えちゃいけない、信じるんだ」という言葉に対して、ユングはひそかに「いや違う、体験し、そして知らなくちゃ」と考えていたと記されている。その後、フロイトとの決別後、深い心理的危機に陥ったユング自身の夢やアクティブ・イマジネーションにおいて、宗教的

なモチーフが数多く出現したことは、ユングの宗教の背景にある心理的意味の探求の大きな動因となった。その研究は、1942年の二つの論文「三位一体の教義に対する心理学的接近」、「ミサにおける変容象徴」にまとめられた⁴⁰⁾。これらの研究の焦点は、キリスト教のミサにおける犠牲表象に向けられていた。ユングはその背景に「はじめは散らばっていた部分からなっていたものの新たな統一の総合であるが、同時に、自我に先立って存在し、いわばその父あるいは創造主で、その全体でもある何者かがあらわになる」⁴¹⁾ 個の確立過程があると結論している。キリスト教のミサにおいて信徒は、三位一体の教義により、神との一体性を認証されたイエスの十字架上の死が想起することを求められる。イエスは、神が人間のためにさげられた犠牲であり、同時に神自身でもあった。この儀式において、自分自身を犠牲として捧げるイエスは、神として苦しみの中に死を迎え、人間はこの体を食して、その神性に参与するのである。この儀礼の心理的背景は、個性化の過程としてとらえてみるとよく理解できる。すなわち、人間は自我に、神は自己に置き換えられる。自己犠牲は、自我による利己主義の放棄であり、自我中心の在り方の放棄に他ならない。自我中心的な、利己的なあり方を放棄した時、人は新たな統合へと向かう。あるいは、変容の過程が生じるとき、これまでの古い自我の在り方は、放棄せざるをえず、それは古い自我中心の在り方の放棄として体験される。しかし、この放棄において十分な苦しみへの主体的関与が体験されることが何より重要である。これが体験されない時、人は自己に同一化してしまい、自我が崩壊する危険にさらされる。自我は受難の主体を引き受けることによって、その崩壊の破片があらたな統合へと向かう。つまり自我は消滅するのではなく、存続して新たな存在へと変容するのである。こうしてユングは、キリスト教にみられる犠牲象徴の背景に、自我が変容する過程として個性化のダイナミズムを想定したのである。

③錬金術師の著作による検証

錬金術は自然科学的経験と神秘的な哲学が一体であった時代の産物である。そのような16世紀の末に出現した錬金術師の著作に対して、ユングは「探求者の意識が未知なるものの闇に対峙し、そこにさまざまな形象と法則を見た信じていた時代…これらの形象と法則は物質から生じたものではなく、心から生じたものであった。すべての未知なるもの、空白なるものに心理的投射が向けられるのである。それは、あたかも闇の中に観察者の心の深層が映し出されるかの如くである。観察者が物質の内に見ているもの、認識していると思いついでいるものは、まず第一に観察者がそこに投影している自分自身の無意識諸内容なのである。」⁴²⁾ という理解のもとで、心理学的考察を行った。キリスト教が人間を救済されるべきものと考え、その救済を自律的な神のイメージすなわち自己のイメージの出現にゆだねるのに対して、錬金術は、救済の「作業（オプス）」を遂行する義務を自身で引き受けて物質の中にとらわれている神性の救済に取り組むものであった。そこには救済を受ける側から、提供する側への大きな立場の転換が生じている。一人ひとりの錬金術師がこの過程に個人的に

取り組み、そこでの体験が著作にとどめられたのである。それらの著作の中には、誇大的な記述、香具師的レトリックに満ちたものも多いが、中にはその思考過程がよく練り上げられ、精神的格闘の跡がはっきりと読みとられるものもあるという。ユングにとっては、錬金術の著作に書かれた内容の真偽ではなく、それが書かれた精神的過程こそが、読み取る対象であった。錬金術の本質は〈プリマ・マテリア（第一資料）〉すなわち〈カオス（混沌）〉を、アクティブなものとはパッシブなもの、すなわち魂と体とに分離し、この分離の後で、両者は人格化された姿で〈結合・もしくは化学の結婚〉として、ふたたび合一される。この結合は聖なる結婚として、すなわち太陽と月との祭儀的な〈床入りの儀〉として寓意的に表現され、この合一から〈賢者の子〉が生み出される。これはメリクリウスであり、その完全無欠な理想状態を示すために、両性具有として描かれていると要約される。ユングによれば、これらの、分離、対立、そして結合という動的過程は、心の内なる変容過程として、理解されたのである。

結語

タイプ論、精神分析論、夢や象徴、宗教、錬金術など、一見、まとまりのない多様な研究の集積と思われがちなユングの著作系列は、個人の心を自然的存在としてとらえ、その自然のダイナミズムを体験し、探求してきた経過の記述であるにとらえたときに、一貫性を持つパーソナリティ研究の系列として浮かび上がってきた。本研究は、ユングによる個の心の理論、パーソナリティ理論をとらえる一視点を提供するものであった。この視点を出発点として、さらにユングによる心理療法理論の検討が、今後の課題となるだろう。

注

- 1) Jung, C. G. Jaffe, A. 編 1963 『ユング自伝 1』 河合隼雄他訳 1972 みすず書房 p. 131
- 2) Jung, C. G. Jaffe, A. 編 1963 『ユング自伝 1』 河合隼雄他訳 1972 みすず書房 p. 127
- 3) Jung, C. G. 1921 『タイプ論』 林道義訳 みすず書房 par. 696
- 4) Jung, C. G. 1921 『タイプ論』 林道義訳 みすず書房 par. 696
- 5) Jung, C. G. 1921 『タイプ論』 林道義訳 みすず書房 par. 623
- 6) Jung, C. G. 1921 『タイプ論』 林道義訳 みすず書房 par. 625
- 7) Jung, C. G. 1921 『タイプ論』 林道義訳 みすず書房 par. 640
- 8) Jung, C. G. 1921 『タイプ論』 林道義訳 みすず書房 par. 641
- 9) Jung, C. G. 1921 『タイプ論』 林道義訳 みすず書房 par. 1025
- 10) Jung, C. G. 1921 『タイプ論』 林道義訳 みすず書房 par. 1025
- 11) Jung, C. G. 1921 『タイプ論』 林道義訳 みすず書房 par. 969
- 12) Jung, C. G. 1921 『タイプ論』 林道義訳 みすず書房 par. 963

- 13) Freud, S 1900 「夢判断」フロイト著作集2 高橋義孝訳 人文書院
- 14) Jung, C. G. 1931 「心理療法の目標」『心理療法論』林道義訳 1989 みすず書房
- 15) Jung, C. G. 1931 「心理療法の目標」『心理療法論』林道義訳 1989 みすず書房
- 16) Jung, C. G. 1931 「心理療法の目標」『心理療法論』林道義訳 1989 みすず書房
- 17) Freud, S 1920 「夢理論の再考察」フロイト著作集
- 18) Jung, C. G. 1936-1941 子どもの夢セミナー 『子どもの夢』氏原寛他訳 1987 人文書院
- 19) Jung, C. G. 1964 『人間と象徴』河合隼雄他訳 1975 河出書房新社
- 20) Freud, S 1920 「夢理論の再考察」フロイト著作集
- 21) Jung, C. G. 1964 『人間と象徴』河合隼雄他訳 1975 河出書房新社
- 22) Jung, C. G. 1957 「超越機能」『創造する無意識』松代洋一訳 1996 平凡社ライブラリー 平凡社
- 23) Jung, C. G. 1928 『自我と無意識』松代洋一他訳 第三文明社 レグルス文庫 p. 26
- 24) Jung, C. G. 1921 『タイプ論』林道義訳 みすず書房 par. 825
- 25) Jung, C. G. 1936 『元型論』林道義訳 1982 紀伊国屋書店 p. 87 (「集合的無意識の中のいくつかの元型について」 par. 82)
- 26) Jung, C. G. 1936 「集合的無意識の中のいくつかの元型について」『元型論』林道義訳 1982 紀伊国屋書店 p. 87 (par. 82)
- 27) Jung, C. G.; アニエラ・ヤッフェ編 『ユング自伝1』 河合隼雄他訳 1972 みすず書房 p. 141
- 28) Jung, C. G. 1921 『タイプ論』林道義訳 みすず書房 par. 825
- 29) Jung, C. G. 1921 『タイプ論』林道義訳 みすず書房 par. 825
- 30) Jung, C. G. 1921 『タイプ論』林道義訳 みすず書房 par. 825
- 31) Jung, C. G. 1928 『自我と無意識』松代洋一他訳 第三文明社 レグルス文庫 p. 94
- 32) Jung, C. G. 1944 『心理学と錬金術 I』池田紘一他訳 1976 人文書院 p. 139
- 33) Jung, C. G. 1944 『心理学と錬金術 I』池田紘一他訳 1976 人文書院 p. 139
- 34) Jung, C. G. 1944 『心理学と錬金術 I』池田紘一他訳 1976 人文書院
- 35) Jung, C. G. 1944 『心理学と錬金術 I』池田紘一他訳 1976 人文書院 p. 148-149
- 36) Jung, C. G. 1944 『心理学と錬金術 I』池田紘一他訳 1976 人文書院 p. 250
- 37) Jung, C. G. 1911-1912 『変容の象徴』野村美紀子訳 1985 筑摩書房 p. 652
- 38) Jung, C. G. Jaffe, A. 編 1963 『ユング自伝1』 河合隼雄他訳 1972 みすず書房 p. 131
- 39) Jung, C. G. Jaffe, A. 編 1963 『ユング自伝1』 河合隼雄他訳 1972 みすず書房 p. 71
- 40) Jung, C. G. 1942 『心理学と宗教』村本詔司 1989 人文書院
- 41) Jung, C. G. 1942 『心理学と宗教』村本詔司 1989 人文書院 p. 240
- 42) Jung, C. G. 1944 『心理学と錬金術 II』池田紘一他訳 1976 人文書院 p. 10

ENGLISH SUMMARY

A Review on C. G. Jung's Personality Theory — From the Standpoint of Nature and Dynamism —

YOSHIKAWA Mari

C. G. Jung developed his personality theory, based on inspiration Freud's Psychoanalysis. His personality theories on consciousness and unconsciousness, typology and individuation are unique in that he regarded mind as a part of nature. In Jung's view, a model for the mind is living nature and the dynamism of mind is

based on a biological factor. The aim of this research is to examine the personality theories of C. G. Jung in terms of nature and life science. At first his theories pay attention to the compensation function of the unconsciousness. Secondly, they have the same purpose which is to realize their own uniqueness as an individual from a biological view. Each of his theories, on consciousness and unconsciousness, typology and individuation are connected with each other and converge to transcendent ego-centrism, toward the realization of their own self which consists of a conscious mind and an unconscious realm.

Key Words: C. G. Jung, Nature, Compensation, Individuation, Personality,